

雪の森の夢



桜井あや

雪の森の夢

「雪の森の夢」

暑くて何度か寝返りをしてるうちに、すっかり目がさえて起きてしまった。
重たい体を引きずるように出口まで歩くと、ヒンヤリした空気が温まった体を一気に冷やす。
目の前には真っ白な森が広がっている。
雪が深くつもっていて、木々の背がちぢんでしまってるみたいだ。
（まだ冬じゃないか・・・まだまだ寝ないと・・・）
部屋に戻って、ふかふかのベットにもぐって横になっても眠たくなならない。
お腹が空いていたので、ベットのそばに置いていた木の実をかじる。
（お腹がよけいに空いてしまった。なにか美味しい物でも狩って、食べて眠るか・・・）
部屋から出て、森を歩くと、春と違ってとても静かだ。
冬はみんなほとんど寝ている。リスも木も、そしていつもなら自分も。

白い息をはきながら、雪をかきわけ。
いくつか沢を渡り、岩山をこえると、人の作った道に出た。
その道の途中で転がってる茶色い物体があった。
ゆっくりゆっくり近づく。
人の子供だ。近づいても起きない。
（これを食べれば、お腹も満たされて眠れるな）
大きい鼻で子供をつつついてみた。すると子供はハチミツのような甘い笑顔をした。
「お母さん」
子供はそれだけ言うと、また眠ってしまった。
人の子供を自分の大きい手や大きい爪で傷つけないように、優しく抱きかかえた。
子供は雪のように冷たかった。自分の毛皮で子供の体を温めるように包み込んだ。
大きいため息をついた。
雲のような白い息は雪の森に吸い込まれていった。

部屋に戻ると、子供を自分のベットに寝かした。
ほっぺがとても赤い。少し苦しそうに息をしている。
台所で湯を沸かして、とっておきのリンゴの香りのハチミツをカップに入れて、
そこにお湯を入れた。
カップに息をふきかけ、少し冷ましてから、
スプーンにハチミツ水を入れ、子供の口に近づけた。
ゆっくりと飲み込むを見て、安心した。
全部飲ませ終わると、子供のほっぺがゆるんで、リンゴのように美味しそうにぷっくりした。
（さて、食料を探しに行かないと・・・この子を食べてなくなってしまう。）
空腹のお腹をかくすように背中を丸めて、雪の森に向かった。

看病をしていくうちに、子供の熱はおさまってきた。
タオルをしぼる自分の手を見たとき、はたと気づいた。
人は、自分をとても怖がる。
大きい体、大きい手、大きい爪、大きい口、するどい目。
子供も目が覚めたら、おどろいて逃げようとするだろう。

しかし逃げられるほどには体が回復していない。怖がらせてしまうだけだ。
茶色の毛皮の腕を組んで、必死に悩んで、部屋のはじっこにある大きい箱を開けた。

大きい箱の中には、森の中で見つけた物がたくさん詰まっている。
自分の体を映す物や、息を吹きかけると音の鳴る物、
跳ねる丸い物（これが以外と気に入ってる）、キラキラ光る石、いろんな物が入っている。
その中から白い毛糸の帽子とマフラーを取り出した。
（たしか人はこうして身につけていた。）
思い出しながら、白い毛糸の帽子をかぶり、
白い毛糸のマフラーを太い首になんとか巻きつけた。
（これで少しは人に見えるかな？）
「・・・クマ？」

後ろで声がした。びっくりして振り返ると、
子供がバットに横になったまま、自分を見ていた。
（たしか人はよくこのポーズをしていた）
笑って、右手でピースをしようとしたけれど、2本の指以外を曲げるのはむずかしい。
不器用なピースをして子供を見た。
子供は不思議な物を見るような目をして、じっと自分を見て、またそのまま眠った。

ウサギ肉と保存しておいたジャガイモを鍋で、煮ていると後ろからまた声がした。
「何か手伝うことある？」
子供がニコニコしながら立っている。
人の言葉はさっぱりわからないが、自分の姿におびえていないことは分かった。
子供の熱は下がり、動き回れるくらいに回復した。
今ではご飯も食べれる。子供を見てイスを指差した。
（もう少しで出来るから、座って待っていなさい。）
「わかった！お皿とスプーンを用意するね！」
子供はテーブルの上お皿とスプーンを用意し始めた。
（・・・違う。）
小さいため息をついて、鍋をかき混ぜた。
だけど体の真中がほっこり温かくなった。
ご飯前でお腹が空いてるのに、満たされた気分になった。
こんな気持ちは初めてだった。

一緒に何度も真っ白な森に沈む夕日を見た。
何度もいっしょにウサギの足跡を探した。こんなに眠らない冬は初めてだ。
言葉はお互い分からないけど、相手の目を見ると言いたいことはなんとなく分かった。
楽しい日々だったけど、冬は食べる物が本当に少ない。
せめて冬になる木の実があればいいのに・・・。
子供にはお腹いっぱい量だけど、自分はいつも空腹だった、
この10倍・・・いや20倍は食べたい。
時々、となりに座る子供を食べてしまいたくなる。このままではいけない。

子供に初めて大きい箱の中身を見せた。
子供は夢中になって、箱の中身を取り出しては、遊び始めた。
自分はそっと部屋を出て、冬の森に向かった。

(もっと大きい獲物を見つけないと。冬を起きたまま過ごさないと。)

(自分が眠ってしまえば、あの子だけでは冬を生きていけない。)

いつもより遠くまで歩いた。

冬の森で大きい獲物達はどこにいるのだろう。

冬の山や森については知らない。いつも冬はずっと眠っているから……。

猟師は自分の目をうたがっていた。

森の奥のほうにいたクマは、白い毛糸の帽子をかぶり、
器用に白い毛糸のマフラーをしていたから。

50年猟師をしていて初めて見た。

だから手元が少し狂ったのだ。

ズ キューン

雪の森を切り裂くような音がした。右肩に激しい激痛がおそった。

(しまった！猟師だ！)

左手で思いっきり雪をかきあげた。

真っ白い雪が一瞬自分の姿を隠した。

急いでその場所から走って逃げた。

雪が空から舞い降りてきた。

森の木や自分をゆっくりと雪の中に隠してくれる。

雪の上に落ちた血のあとも。

部屋になんとか戻ると、子供は大の字になって眠っていた。

子供の周りには、大きい箱に入っていた物がたくさん散らばっていた。

安心したら右肩の痛みがさらにひどくなった。

(このままでは死んでしまうかもしれない。せめてご飯を食べて、元気になるないと。)

目の前には、ふっくらとした美味しそうな子供が眠っている。

……ゆっくりと子供に近づいた。

外に出ると、真っ白い羽のような雪が降っていた。

いつもよりずっと静かな森の中は時間が止まっているようだった。

(このまま時間が止まってしまう方がいいのに)

(空腹も無く、この静けさの中で、子供とゆっくり過ごせたら、どんなに幸せだろう。)

抱きかかえた毛布でくるんだ子供を、優しく見下ろす。静かに寝息をたてている。

(雪の森の見せた夢だったんだ。起きるのがもったいないくらいの幸せの夢。)

雪の森をゆっくりといとおしく歩き始めた。

目が覚めると、布団の中にいた。布団のそばに優しくなおばさんが座っていた。

「あ！よかった。目が覚めたのね。」

「今温かい飲み物もって来るね。」

おばさんは駆け足で部屋を出て行った。

静かになった部屋の中を見回した。

ずっと寝ていた土の部屋やじゃない。

ふかふかのものすごく大きいベットが無い。

すごく大きいテーブルとイスも無い。

自分のために作ってくれた小さいイスも無い。

何よりも真っ白い毛糸の帽子と真っ白い毛糸のマフラーをしたクマさんがいない。

涙が止まらなかった。

きっともうクマさんに会えないような気がした。

私はおばさんの家の玄関で倒れていたらしい。

ボロボロの毛布に包まれて。

大人たちに真っ白い毛糸の帽子と真っ白いマフラーをしたクマさんの話をしたけれど、だれも信じてくれなかった。

村はずれの小川の橋に腰かけて、真っ白い山を見上げた。

雪の森の見せた夢なんかじゃない。

不器用なピースしか出来ない優しいクマさんは、あそこに住んでいる。

私は雪の森に向かってピースした。